

第一章 アボンリーでの驚き

レイチェル・リンド夫人はキッチンの窓のそばに腰掛けています。

そこからは通りがとてもよく見えるので、リンド夫人はそこに座るのです。

一人の男性が馬車で道を上って来ます。

「私の友人のマシュー・カスバートだわ」と彼女は思います。

「午後の 3 時半なんかには彼はどこへ行くんだらう？ どうして農園で働いていないんだらう？」

マシュー・カスバートは妹のマリラと、大きくて古いグリーン・ゲイブルズという農園の家に住んでいます。

「マリラを訪ねることにしよう」とリンド夫人は思います。

「マリラにマシューのことについて尋ねたいわ」

マリラ・カスバートは背が高く、白髪交じりで青い目をした痩せた女性です。

彼女はあまりほほ笑むことはないのですが、優しい心を持っています。

「こんにちは、マリラ」とリンド夫人が言います。

「今日の午後、マシューはどこへ行くんだい？」

「こんにちは、レイチェル」とマリラが言います。

「マシューはブライト・リバー駅に行っているわ。私たちはノバ・スコシアにある孤児院から小さな男の子を引き取るの。彼は列車に乗ってここに来るのよ」

「孤児の男の子だって！」とリンド夫人は驚いて言います。

「どうして孤児の男の子が欲しいのよ？」

「マシューは 60 歳よ」とマリラは答えます。

「マシューの心臓はそれほど丈夫ではないわ、それでマシューは農園で彼を手伝ってくれる男の子を欲しがっているのよ」

「それはいい考えじゃないわね、マリラ」とリンド夫人は言います。

「あなたたちは見知らぬ男の子を自分たちの家に迎え入れるのよ、それにその子のことについて何も知らないじゃない」

「ひょっとするとあなたの言う通りかもしれないわね」とマリラは言います。

「でもマシューは農園で男の子が必要なよ。心配しないで！」

マシューがブライト・リバー駅に着くと、列車はありません。

駅には 11 歳の少女がたった一人いるだけです。

彼女はとても痩せており、長くて赤い髪、そして大きな灰色の目をしています。

彼女は不格好な服を着て、古びたカバンを持っています。

彼女はマシューを見ると、「あなたはグリーン・ゲイブルズのマシュー・カスバートさん？

私は孤児院から来たの」と言います。

マシューは少女を見て、とても驚きます。

「手違いだな」と彼は言います。

「君は女の子じゃないか、男の子でなくて！」

少女はにっこり笑って言います。

「もうすぐ我が家を持つことになるんだもの、私はうれしいわ！ 何てすてきなことかしら！」

マシューは彼女を見て思います。

「かわいそうな女の子だ。この子を駅に置き去りにするなんてできないよ。この子を家に連れて行かないとならん、それからマリラが間違いについて孤児院に伝えてくれるさ」

少女は馬車に乗り込み、マシューは家へ馬車を走らせます。

彼女はたくさん話し、マシューは耳を傾けます。

マシューは物静かな男性ですが、その少女の話を聞くのが好きです。

「あの美しい木々を見て」と少女はうれしそうに言います。

「私は木や花が大好きなの。私はかわいい服も好きよ、でも孤児院では私たちは不格好な服しか持っていないの。私はあなたとあなたの家族と幸せになるんだわ。私を悲しませるたった一つのことはね、私の髪の色よ」

「どうしてだい？」と彼女の髪を見ながらマシューが尋ねます。

「赤いんだもの。私は赤毛が大嫌い」と少女は悲しそうに言います。

彼らがグリーン・ゲイブルズに到着すると、マリラがドアを開けます。

「こちらはどなた、マシュー？」と少女を見ながらマリラは尋ねます。

「男の子はどこにいるのかしら？」

「男の子はいないんだ」とマシューが言います。

「でも私たちは男の子が欲しいのよ、女の子じゃなくてね」とマリラは怒って言います。

「私のことなんかいらぬのね！」と少女は泣き叫びます。

「あなたたちは私が女の子だから私がいらぬのね！ ああ、私はどうしたらいいの？」

「どうか泣かないでちょうだい」とマリラが言います。

「今夜はここに泊まっていいわよ。あなたのお名前は何？」

「私の名前はアン・シャーリーです」と少女は言います。

「アンってとてもすてきな名前ね」とマリラは言います。

「いらっしゃい、私たちと一緒に夕食を食べましょう」

夕食後、マリラはアンを2階のベッドに連れて行きます。

アンは清潔で温かいベッドに入ると、泣き出します。

マリラは1階へ行き、マシューと話をします。

「明日スペンサー夫人に話をしに行くわ」とマリラは言います。

「私たちはこの女の子を孤児院に送り返すのよ。私たちには男の子が必要なもの」

「彼女はいい女の子じゃないか」とマシューはゆっくり言います。

「それにあの子は面白いしね。あの子は私たちを気に入っているよ」

「でもねマシュー、女の子は農園であなたの手助けができないわ」とマリラはお兄さんを見て言います。

「だがなマリラ、もしかしたら、わしらがあの子のを助けてあげられるかもしれんぞ」とマシューは優しく言います。

翌朝、アンは目を覚ますと、窓にかけ寄ります。

よく晴れた美しい朝です。

「ここは美しい場所だわ、今朝、私は幸せよ」とアンは思います。

「でも私はここにはいられないのね…」

その朝、マリラとアンは馬車に乗ってスペンサー夫人の家へ行きます。

「あなたのお話を聞かせてちょうだい、アン」とマリラが馬車を操りながら言います。

「あまり面白くないわ」とアンは言います。

「私は孤児で、他のたくさんの子たちと孤児院に住んでいるの。私は世界で独りぼっちよ。誰も私のことを欲しがらないし、愛してもくれないの。私は本当に家族が欲しいわ…」

マリラは急に悲しい気持ちになり、アンの大きな灰色の目を見つめます。

二人はスペンサー夫人の家で止まり、マリラは間違いについてスペンサー夫人に話します。

「まあ、ごめんなさい」とスペンサー夫人が言います。

「でもひとつ案がありますわ。私の友達のブルウェット夫人が、彼女を手伝ってくれる女の子を必要としているんですよ。彼女には生まれたての赤ん坊とたくさんの子どもたちがいましてね」

「ブルウェット夫人ですって？」とマリラが尋ねます。

「彼女のことを知っているわ、彼女はとっても意地悪な女性よ。私は彼女のことを好きじゃないわ。結構よ、ひとまずアンは私たちと一緒に暮らすこととしましょう」

マリラとアンはスペンサー夫人の家を出て、馬車に乗り込みます。

「ああ、マリラ」とアンは興奮して言います。

「私はあなたとマシューと一緒に暮らせるの？ いいのね？」

「ええ、グリーン・ゲイブルズで私たちと一緒に暮らしているのよ」とマリラはにっこりして言います。

「でもお利口にしてないとね」

「ああ、ありがとう！」とアンは涙を流します。

「私はいい女の子よ、マリラ、それに一生懸命働くことだってできるわ！」